

## 「エラスムス派遣提案型プログラム参加報告書」

京都大学文学部・研究科修士1年 田中凌

## ①学習成果

派遣期間中には、まず派遣者の修士論文の研究の面において、成果を挙げることができた。派遣先の指導教授に週に一度、1時間ほどのチュートリアル時間を設けて頂き、修論の構想および執筆を進めた。最終的には論文の初稿を完成させることができた。

また、指導教授が担当している授業を中心として、Yale-NUS college および NUS で開講されている講義、セミナーにも参加した。これらはすべて英語で行われているため、派遣者も問題なく参加することができた。教授が担当されている授業の中には仏教哲学をテーマとしたものがあり、この授業に参加し、また授業外でもディスカッションをすることで仏教哲学への理解を深めた。NUS ではほかに、院生による研究の発表セミナーにも参加し、現地の生徒の研究内容を見るとともに、どのような指導法がとられているのかも見ることができた。

さらに、教員を中心とした読書会、および新しく出版される書籍の検討会などにも参加した。これらは教授の自宅で開かれることも多く、フレンドリーな雰囲気の中での自由なディスカッションを体験した。また、NUS では週に一度ほどの間隔で、ゲストスピーカーによる自身の現在の研究の発表会が開催されている。これらにも積極的に参加し、哲学の研究者の最先端の研究内容に触れ、また研究途上の内容が発表とディスカッションを通しどのように改善されていくのかという現場を見ることができた。

## ②海外での経験

シンガポールという国について言えば、まず何よりも多民族、多文化がうまく共生できている国である、という印象を受けた。生徒でも、街を歩いている普通の人たちでも、中国系、インド系、マレー系、(おおよっぱだが)西洋系という具合に、様々な人種がひとところで生活していた。特に感じたのが、それぞれの民族が他の民族に対して排他的になりすぎていないという点で、キャンパス内でも様々な人種の人たちが入り乱れていた。今まで世界の様々なところで教師を務めてこられた指導教授も、人種ごとに固まることなく交流しているという点でシンガポールには驚かされ、そこが良い点であると指摘されていた。

特に食事という点ではシンガポールには非常に感銘を受けた。様々な民族がそれぞれの食文化を持ち込み、それがお互いに混ざり合ったり、と食文化に関してシンガポールは非常に豊かな国であると感じた。現地のフードコートでは様々な文化からの料理を非常に安価で食べることができ、これが楽しめないと言うことが派遣者が日本帰国に際して残念に思うことの一つである。

また、若い世代の内では、日本文化(有名なことだが、特に漫画、アニメ)が浸透しているということも感じた。Yale-NUS college には Japanese Society というものがあり、派遣者は定期的に彼らと交流をもち、日本文化がどのように浸透しているかを体験した。

## ③プログラム内容

半年というある程度の長期間滞在することができたので、①でも触れたとおり、現地の学生生活に近い生活を送ることができた。NUS の生徒の多くは寮に住んでおり、派遣者も今回その一つに宿泊していたのだが、大学の中に住むと言う環境は勉強にも集中でき、また大学内の人との交流の機会も多く、メリットを多く感じた。

派遣中には、京都大学哲学研究室の学生、研究員と Yale-NUS college および NUS の教員によるジョイントカンファレンスが開催され、派遣者はこれに参加するとともに、準備、運営にも協力した。このカンファレンスはアジアという思想伝統における西洋哲学の受容と変化をテーマとし、4日間にわたって有意義なディスカッションを行うことができた。

## ④進路への影響

英語での研究、教育が行われる場に属し、現地の学生と同様の生活を半年間送ることができたのは非常に有意義であった。今後また研究を海外で行う機会があるとすれば、今回の派遣はその下地として有効に機能するものと思う。また、同じアジア圏でありながら、派遣者の何倍も流暢に英語を使う生徒たちに囲まれて、派遣終了後も積極的に英語が使用される場に参加し、語学力を上げなければならないということを痛感した。